

## 地球規模課題に関するリテラシー涵養に向けた教育実践 —インドの森林利用と管理を題材として

長濱和代（日本経済大学）

キーワード：地球環境問題、課題解決、英語教育プログラム、森林資源管理、高等教育

筑波大学では英語による学士取得カリキュラムの開発を行っており、2017年から国内外の学生を対象に「地球規模課題学位プログラム（学士）：BPGI(Bachelor's Program in Global Issues)」を開始した。地球規模課題とは、国境を越えて地球全体に関係する、私たちが現在直面しており解決せねばならない複雑な課題の総称である。地球規模課題の解決は困難を極めるが、身近な生活の中から解決策を考えることが可能である。（筑波大学 BPGI プログラム案内）

筆者は林政審議会委員を務めており、大学では社会政策の授業を担当していることから、森林政策の専門家（講師）として「地球規模課題基礎論（環境）」の授業に登壇する機会を得た。学生の対象は1年生10名で、2019年10～11月に6回の授業を実施した。地球規模の課題解決に向けては、自分なりの解決策を見つける力を養うためのPBL（Problem/Program Based Learning）形式の授業展開を試みた。

授業の前半では、世界の森林の現状と課題、森林資源を生活のために必要とするインドヒマラヤ地域の人々の森林の利用と管理の事例を学び、次に身の回りの森林に目を向けて、学生の出身地や滞在地域周辺の樹林地について歴史やその利用管理などを、「My Favorite Forest(私のお気に入りの森)」として自由に調べて発表した。授業の後半では、国連の到達目標であるSDGsの理解と実践について学び、学生たち自身で実現可能な目標について考えた。

わずか全6回の授業であったが、毎時間のリフレクションシートの結果や、それぞれの森の発表について学生による相互評価、さらに筆者へのインド森林資源管理研究のコメントから、学生の森林への興味関心が涵養され、森林や環境の課題については、まずは知ることこそ重要である（行動するための土台）とする認識が高まった。大学で専門家との交流を通じて講義を受講することは、学生らの学びの可能性を広げたといえる。さらに専門家にとっても、英語により海外から学生たちと議論しながら受講できる環境は、講師としての授業力や専門性が鍛えられる。筑波大学のBPGIの今後のカリキュラム開発に期待したい。